

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

Making Interlingual Meaning: Japanese Subtitles in English-Language Narrative Film

中間言語的意味の創造—英語の物語映画の日本語字幕—

氏 名

KABARA Thomas John

## 論 文 内 容 の 要 旨

本博士論文は、字幕付き物語映画で意味がどのように創造されるかを検証している。映画がどのように意味を創造するのかは複雑な問題である。そこに中間言語的な字幕を追加すると、問題はさらに複雑になるだろう。したがって、本論文は、字幕が映画の意味にどのような影響をどの程度及ぼすかという問題を深く掘り下げている。

このことを論証するために、本論文は英語の映画の日本語字幕に焦点を当てている。その理由は二つある。第一に、英語と日本語は言語間の隔たりが大きいため映画字幕がさまざまな面で強く制限されるので、英語の映画の日本語字幕は、字幕がどの程度物語の意味を制御するのかを考察するのに適しているからである。第二に、日本における字幕作成では、他国の字幕業界に比べ字幕翻訳者が大きな影響力をもち、強力な専門的なリーダーシップを果たしているからである。日本の字幕翻訳者の字幕に対する考えを検証すると、彼ら彼女らが、字幕に対して「限定された概念」と「拡張された概念」という相反する考え方を有していることが分かる。

第一章では本論文全体の導入として、起点テキスト、すなわち字幕をまだ付けていない映画における物語の意味創造を字幕が阻害しているという一般論を再考する必要があることを論じている。そのような一般論は、映画字幕に関する三つの不適切な仮定を前提としている。その三つとは、1.外国語映画を理解するため、視聴者は字幕のみに依存してしまっていること、2.字幕は起点テキストの文化と接触するだけのために作成されていること、3.起点テキストの重要な伝達事項が字幕によって失われていること、である。本論文は、第二章以降が第一部と第二部から構成され、上記三つの仮定に対し反論を行なっている。すなわち、第一部（第一章と第二章）「限定された字幕概念」で最初の二つの仮定に反論し、第二部（第三章から第七章まで）「拡張された字幕概念」で最後の仮定に反論している。

第一部では、映画字幕の主な機能は起点テキストの物語の情報を伝えることだという考え方を再検討している。

まず第二章で、起点テキストからの物語情報を伝えるための映画字幕の役割は流動的なものであることを論じている。字幕は、起点テキストの映像、台詞、音声等の一貫性を混乱させる。この一貫性の崩壊により、目標テキストの視聴者は、映画の「物語の真実」を求めた際、映像、字幕、台詞などのなかでどれに注目し、何を信じるかについての選択に迫られる。

第三章では、字幕を制作する素人（ファンサバー）とプロの字幕翻訳者を比較している。ファンサバーは起点テキストの文化と接触するための字幕制作を目的とするのに対し、プロは感情的な体験を再現するための字幕制作を目的としている。しかし本章では、ファンサバーとプロの両者に共通する、最終的な目的にかかわらず物語情報の伝達を優先するという限定された字幕概念に注目している。

そして、第二部では、字幕概念の拡張を提唱している。字幕は単なる物語情報を伝える手段としてのみあるのではなく、物語の合理的推測の機会を増やす手段として捉えられることを論じている。

第四章では、起点テキストの伝達事項は字幕によって失われることはなく、むしろ質的な広がりをもたらすという、映画字幕の新しい概念を論じる。これはクリスティアーネ・ノード(Christiane Nord)の文学翻訳に関する理論に基づいている。ノードによると文学翻訳は起点テキストのいわゆる「質的な広がり」の促進を可能にするという。本章では、ノードの理論を映画字幕に適用すると、字幕翻訳には制約があるにもかかわらず、映画字幕は起点テキストを発展させる可能性があることを指摘する。具体的に言えば、字幕翻訳は目標テキストの視聴者に新たな合理的推測の機会を作り出す。そこで新たに促された合理的推測は、目標テキストでしか成立しえないものである。

第五章から第七章では、「質的な広がり」をもたらす映画字幕の例を挙げる。第五章では、『ゼア・ウィル・ビー・ブラッド』（2007）の日本語字幕を詳しく分析し、字幕翻訳者が起点テキストの台詞の意味内容を省略することで、目標テキストの視聴者は起点テキスト文化と目標テキスト文化の両方を含む知識を活用し、それによって合理的推測の機会が増える状況が生まれていることを指摘する。

第六章では、『ブリッジ・オブ・スパイ』（2015）の字幕戦略を分析し、その字幕により視聴者は、起点テキストの視聴者ではできない方法で推測するように促されることを論じる。具体的には、本作では引用符が例外的に使用されていることで、視聴者がその内容に主題的または多層的な意味を自己解釈で見出すことが可能になっていることを指摘する。これは柳父章が「カセット効果」と呼んだものに相当するだろう。

第七章では、『ペンタゴン・ペーパーズ/最高機密文書』（2017）の字幕戦略を分析し、字幕が「参照チャンク」と見なされることで、翻訳は起点テキスト視聴者には得られない合理的推測の可能性が追加されていると論じる。本作品では、引用符が例外

的に使用されているように、字幕翻訳者が引用符付きの字幕に多くの意味を凝縮している。この「参照チャンク」は、両方の文化を融合することにより、目標テキスト視聴者の物語の解釈過程に新たな意味創造の場をもたらしている。

最後に、結論に当たる第八章では、目標テキスト視聴者と起点テキスト視聴者の合理的推測の過程を比較する実証的研究計画を提案している。